

---

# バカとISと幼馴染と召喚獣

takumi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとISと幼馴染と召喚獣

### 【Nコード】

N7489Z

### 【作者名】

takumi

### 【あらすじ】

・バカ幼のメンバーがIS学園に入学して過すどたばたコメディ。

## ブログ

・銀河side

始めまして北条銀河です。我々はただ今受験を受けに文月学園の受験会場に向かっている。

ちなみに我々とは俺と幼馴染の2人である吉井明久と服部瞬の三人のことである。

「さ、寒い……………」

「寒いねー」

「寒いでござるのー」

しかし、受験は学園ではなく四駅先の多目的ホール。まったく、めんどい。

「それにしても、バカなことをする人もいたもんだね。カンニングするなんて」

「まあ、そうでござるのーこうゆう事は自分の力でやらなければいかんのにのーところで銀河殿？大丈夫でござるか？凄く震えているでござるが」

「だ、大丈夫…大丈夫…」（ガクガクブルブル）

「全然大丈夫じゃないね（でござるのう）」

うるせー…俺は何故か寒いのに弱いんだよ。

「ほら、頑張って銀河」

「そうでござるよ。あと少しの我慢でござるよ」

「お、おう。頑張ってみる」

そんなこんなで目的地には着いたのだが・・・

「ねえ、銀河、瞬」

「「なんだ（でござる）明久（殿）」」

「僕達道に迷ってない？」

「「迷ってるな（るでござるな）」」

ただ今、絶賛迷子中です。畜生・・・

「はあゝ何で迷子になるかな？」

「知るかよ。はあゝしょうがないサン。ここのマップ出してくれ」

『了解しました。マスター。少し時間を下さい』

俺がポッケからだした指輪から女性の声がする。俺のインテリジェントデバイス【サン・バースト】だ。

「さて、サンが探している間に俺達も歩いて探すか」

「そうでござるのう」

「じゃあ、あそこ開けて見る」

「そうだな」

「それじゃあ・・・」

「「失礼しまーす」」

「お主らせめてノックぐらいはせい・・・」

瞬がなんか言ってるけど気にしない気にしない。

「あー、君達も受験生だよね？はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ、四時までしか借りれないからやりにくい

つたらないわ。全く、何を考えて」

三十代後半くらいの女性教師は、かなり忙しいらしく。俺達の顔を見ずに指示だけ出して言ってしまった。

「今日の受験は着替えまでするの？」

「さあな？と思う瞬？」

「ふむ．．．ん？あそこに誰かおるぞ」

「えっ？あつ本当だ」

「おーい！君！」

「なんだ？」

「君もここに受験しにきたのか？」

「ああ。お前らもか？」

「おう。あ、名前言ってなかったな、俺は北条銀河名前でもいいぞ。んでこつちが」

「吉井明久だよ。僕も名前呼びでかまわないよ」

「拙者は服部瞬でござる。名前でかまわぬぞ」

「銀河に明久に瞬か。俺は織斑一夏。一夏と呼んでくれ」

「んで。まあ話しはここまでにしてさっさと着替えようぜ」

「そうだね。えゝつと？」

「これじゃないか？」

「そのようでござるな」

お着替え中

「さて、着替え終わったが何をすればいいんだ？」

「うゝん？ねえ一夏。何か聞いてない？」

「いや。何も聞いてないぞ」

「なら、瞬は．．．って、何見てるの？」

「あのカーテンの先に何かあるような気がするのでござるが？」

「どれどれ？」

「あつ、これ、勝手にあける出ない」

明久がカーテンを開けるとそこには・・・打鉄二機とラファール・リヴァイヴ二機合った。

「ねえ、これってISだね？」

「ああ。でもなんでこんなところに？」

そう言いながら俺はラファールに明久は打鉄に手を触れる。

キン！！

「「！？」」

「な、なんで？」

「ISが起動した？」

「嘘だろ・・・」

「これは又・・・とんでもない事になったでござるのう」

女性にしか反応しないISを俺と明久が何故か機動させてしまった。

「ええー！？な、なんでISが機動するの！？」

「おいおい・・・瞬。一夏お前らも触れてみる」

「お、おう」

「うむ」

2人もISに手を触れる。

キン！！

そして、2人のISも機動する。

「ま、まじで．．．？」

「はあゝ大変なことになったでござるのう」

「とりあえず、一夏と瞬は今日から俺の家に来い」

「な、なんでだ？」

「考えても見て？僕達は今まで男では起動できなかったISを機動させたんだよ。それを調べるために手荒なことをする輩もでかねないんだよ」

「な、なるほど」

「とりあえず、平和な学園生活は遅れそうにはないでござるのう．．

」

「だな．．．」

平和な学園生活はないようだ。はあゝ

## 連絡

・銀河side

ISに乗れる事が判明してから3日たった。あれから、政府は来るは(因みに一夏は俺達が総理と知り合いという事に驚いていた)研究者が来るは(是非解剖させてくれと訳の解らない奴もいたけど、地面を軽く拳で殴ってひびを入れたらあっさり引いてくれた)マスコミは来るで大変だった。

「はあ、全く、どうなってんのかな？何で俺達がISを動かせるのやら？そこんと何か分かった？ジエイル」

「うーん。こればかりは私も解らないな」

「そつか、そう言えば、俺達のISは？」

「うむ。君達のISはインテリジェントデバイスをIS用に改造しといたよ。つまり、今までと同じ用に戦えるよ。今、こっちに来てる明久君に渡すから今日の夕方までには届くよ」

「そつか、ありがとなジエイル」

「な、に構わないさ。それより君達3人の他にいた男の子名前何て言っただけ？」

「織斑一夏の事か？」

「そうそう。それで調べてみてどうだったんだい？」

「ああ、織斑一夏。第一回モンド・グロッソ大会優勝者織斑千冬の弟。そして、第二回モンド・グロッソ大会決勝戦当日に誘拐されている」

「誘拐とは、また、物騒だね。で？君は誰が犯人だと思っているんだい？」

ファントム・タスク

「亡国企業とドイツ軍が手を組んでやった事だと思う」

「その根拠と理由は？」



「まず、ドイツ軍が一夏を発見した際の速さ。いくら自国とはいえ早すぎる…まるで最初から知っていたような気がする。次に一夏をさらった理由は織斑千冬のデータが欲しかったからだと思う」

『何故だい？』

「ブリュンヒルデとまで呼ばれた人のデータをまじかで撮れたら、軍としてこれほどラッキーな事はないでしょうね。ただ、織斑千冬がそうやすやすとドイツ軍に入るとは思わない。だから織斑千冬に恩を売って確実にデータを撮った。それを何に使うかはまだわかりませんが」

『なるほどね〜で？君はどうするんだい。今後は』

「取り敢えず、一夏を鍛えたいと思います」

『まあ、それは絶対やらなくちゃいけない事だよ』

「ええ。いつ亡国企業ファントム・タスクの連中が襲って来るか分かりませんからね。追いつ返すぐらいの強さはつけてもらわないと」

『だが、どんな風に教えるんだい？』

「3日前にサンで一夏の体のデータを撮ったんですけど、どうやら一夏は魔力を持ってるみたいなんですよね」

『そう言えばサンを改造したら、そんな物が載ってたね。確か、魔力ランクはSS+、魔力変換資質は炎、水、氷、雷、光。術式は古代ベルカ主体のミッドとの混合ハイブリッドだったね』

「あ、はい。ついでに、一夏は剣道をやっていたみたいで、剣術を瞬が、戦闘関連を明久が、戦術面と学習面を俺が受け持つようになるよ」

『デバイスとISの方はどうするんだい？』

「俺が作るから材料送ってくれる？」

『分かった。2時間ぐらいしたらそっちに転送するよ』

「ありがとう。ジェイル」

『それじゃあ、もう切るけど体には気をつけるんだよ』

「ああ。分かってるさ」

『ふふ…そうかい。それじゃあまたね』

「ああ。またな」(ピッ！)

ジエイルとの通信が終わり通信機の電源を切る。

「さてと…一夏達が来るまであと30分ちよいか…お茶の準備でもしますかね」

さて、一夏のデバイスとISはどんなのにしよう？

## 一夏のバリアジャケット

・一夏side

「ここが文月市か！結構大きい街なんだな」

俺達がISを動かせる事が判明して3日。もう3人が文月市にいる為俺もIS学園に入学するまでの1ヶ月銀河の家にお世話になる事になった。千冬姉の説得に時間がかかったが…

「えーっと…確か瞬が迎えに来てくれるって言ってたけど何処だ？」

因みに俺は伊達眼鏡と帽子をかぶっている。一種の変装だ。

「あつ！一夏殿こちらでござるよ」

「あつ！し、瞬？」

瞬の声が聞こえる方を見ると青色の車の運転席の方から手を振っていた。

「な、なんで車を運転してるんだ！？瞬はまだ車を運転できないだろ！？」

「ほへ？一夏殿。拙者はすでに免許証を持っているのでござるが？ほれ」

瞬が俺に免許証を見せてくる。確かに瞬の免許証のようだ。

「そ、それでも何で？」

「まあ、その事については銀河殿の家にいたら話すでござるよ。

所でご飯はもう食べたのでござるか？」

「いや、食べてないけど…」

「では、一旦拙者の家に行つてご飯を食べるでござるか。では、助手席に乗るでござるよ」

「お、おう」

取り敢えず俺は車の助手席に乗り込んだ。

移動中

「じいじでござるよ」

瞬の車に乗ること30分。ついたのはかなり立派な日本屋敷だった。

「瞬つて何処かのお金持ち？」

「あゝ違つてござるよ。これは拙者が働いて貯めたお金で土地を買つて建てて貰つたのでござるよ」

「へえゝ（自分で働いて貯めたお金つて…一体どんな仕事したんだ？）」

「本当は拙者が引き取つた義妹が3人と住んでいるのでござるが生憎3人とも用事でのゝ」

「はゝしかし広いな」

「ふふ。では、その部屋で待つて欲しいでござる。ご飯を作つてくるでござるから」

「ああ。よかつたら俺も手伝おうか？」

「いや、大丈夫でござるよ」

「そつか。じゃあ、失礼します」

俺は部屋に入る。

「では、拙者もご飯を作るでござるかのう。さて何を作ろうでござるかのう?」

銀河side

瞬と一夏が旬の家でご飯を食べてる頃。銀河はと言つと。

「さてと、確かに部品を送って来いとは言ったが…：どんだけあるんだよ!?!5万個ぐらいはあるぞ部品!?!」

ジェイルの奴どんだけ寄越したんだ?

「まあいいか…：取り敢えずデバイスをさっさと作っちゃおう。デバイスなら作るのに3時間もあれば足りるし」

取り敢えず最初にデバイス作りから取り組んだ。

「さてと、一夏はベルカ主体だけど初心者だしインテリジェントデバイスの方がいいよな。取り敢えずカートリッジシステムは組み込んで後は…」

こんな感じで俺は瞬達が来るまで作っていた。

「ただいま」

「ただいま戻りました」

「お邪魔するよ。銀河」

「お邪魔するでござるよ。銀河殿」

「お、お邪魔しまーす」

どうやらみんな一緒に来たみたいだな。

「おかえりアリス、アニス。いらっしやい明久、瞬、一夏」

「ただいま戻りましたご主人様」

「戻りましたご主人様」

「お帰り。健康診断大丈夫だった？」

「はい。2人揃っていたって健康だそうです」

「そうか。それじゃあ着替えておいで」

「はい」

2人の女の子が自分の部屋に行く。

「なあなあ銀河。あの2人って誰だ？」

「ああ。俺の専属メイド？で髪の長い方がアリスで短い方がアニスだぞ。因みにどっちも銀色の髪色だ」

「いや、髪の色は見てわかる。てか、何で専属メイドの所が疑問系なんだ？」

「まあ、気にするな」

「本当は使い魔なんだけどね」(ボソボソ)

「そう言えば、なぜメイド服をいつもあの2人は来ているの？さるか？」(ボソボソ)

「何でも銀河のかあさんがメイド服を渡して着たら気に入ったららしくてそのままってらしいよ」(ボソボソ)

「ふーん」(ボソボソ)

何か2人がブツブツ言ってるが気にしない、気にしない。

「ご主人様。お食事の方は何時頃にお作りしましょうか？」

「あーじゃあ7時頃に食べたいな」

「分かりました」

「それじゃあ俺達は俺の部屋にいるから」  
「お飲み物をお持ちしましょうか？」  
「いや、それぐらい自分でやるよ」  
「かしこまりました」

ふう。さてと…

「そんじゃあ、俺の部屋に行くぞー」  
「「おうー」」  
「お、おうー」

## 銀河の部屋

「さてと、紅茶、コーヒー、緑茶、オレンジジュースどれがいい？」  
「僕は紅茶」  
「俺は緑茶かな」  
「では、拙者も緑茶で」  
「んじゃあ、俺はコーヒーっ」と

カップと湯飲みに飲み物を注ぐ。

「さてと、一夏」  
「な、何だ？」

俺がいきなり真面目な顔つきをしたから驚いている。一夏。

「今から少しお前と俺達の話をする。耳の穴かっぽじってよく聞いとけよ？」

「お、おう」

「じゃあ、説明するぞ。まず…」

説明中

「んで、一夏。感想は？」

「いや、取り敢えず纏めるとだな。お前らは時空管理局という所のエリート局員で魔法が使える。そして、俺にも魔法の素質がある。更に俺の誘拐が元々仕組まれていたものであると……」

「まあ、そんな所だ」

「そして、その組織はまだお主を狙っているでござるよ」

「そうか。なあ、1ついいか？」

「何？一夏」

「俺にも魔法の素質があるって事はお前らみたいに強くなれるって事だよな？」

「うん。勿論それは努力しただけだ」

「なら、俺を強くしてくれないか？いつまでも千冬姉に守って貰ってばっかじゃ嫌だし」

「勿論 その為の僕たちだもんね」

「学園に入るまでには国家代表と渡り合える力までにしてあげるでござるよ」

「ISの方も任せる完璧なお前専用の機体を作り上げてやるよ」

「おう！！」

「そんじゃあまず……ほい」（ポイ）

「おっと、（パシ）これは……剣のペンダントか？」

「これがお前のインテリジェントデバイスつまりお前が魔法を使う為に必要な物であり相棒となる物だ」

「相……棒」

「取り敢えず、マスター認証をするから、移動するぞ」

移動中



N O s i d e

「何で、廊下の壁際に?」

「ちよっと待ってる」(ゴンゴン)

銀河が壁を叩く。そうすると、壁がスライドしてエレベーターが出る。

「うお!? どうなってるんだ!」

「地下秘密基地の入り口の1つさ。さっ! 行くぞ」

地下秘密基地に降りてます

「こ、これは!」

「どう? 結構大きいでしょ?」

「これでやっとこさ8割方完成でござるよ」

「取り敢えず、トレーニングルームに行くぞ」

因みに地下秘密基地はリボーンの日本支部と同じです。

トレーニングルーム

「それじゃあ、マスター登録をするからそこに立ってくれ」

「おう」

「それじゃあ、さっき指示した通りにやってくれ」

「分かった。マスター認証織斑一夏」

「術式は古代ベルカ主体のミッドとの混合ハイブリッド」

「俺の愛機デバイスの個体名称を登録」

「ニックネーム  
愛称はパライト」

「正式名称『ホワイト・パラディン』」

「ホワイト・パラディンSet up!!」

一夏が白い光に包まれる。そこには、白と銀色の軽鎧のバリアジャケットに両腰に日本刀を携えた一夏がいた。

「これが俺の姿？」

「そうだ。まあ、最初はなれない事も有るけど、頑張れや」  
「おう!!」

一夏の修行が今始まる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7489z/>

---

バカとISと幼馴染と召喚獣

2011年12月31日22時52分発行